

髪がつかなく物語

ありのままを受け入れる

岩手大学教育学部附属中学校

三年

水木 みずき

悠仁 はるみ

(男)

いつもより春の訪れが早かった。今年の三月。

僕は母の知り合いの集まりに無理やり連れ出された。

「よっ、久しぶり！元気だった？」

後ろから声をかけられ振り向くと、ニコニコ

と笑顔のおはさんが僕と母に挨拶してきた。

僕はそのおはさんにいつどこで会ったのか思

い出せなかったが、とりあえず頭を下げた。

そうこうしているうちに母がそのおはさんと

世間話を始めた。

「ふさん、ご無沙汰しています。あ、髪の

毛、短くしたんですね。」

「これ、ヘアドネーションしたのよ。」

「すごいですね。短い髪型もお似合いです。」

髪型？ああ、思い出した。このおはさんは一

昨年の同じ集まりのとき、中学の入学祝にと

僕にペンをくれた人だ。あの時は瞬くらいま

で髪が長かったから、パツと見たとき同じ人だと気付かなかったのだ。

3
「ヘアドネーション」初めて聞く言葉だった。髪のを寄付するボランティアだという事はその時教えてもらったが、短髪で男子の僕には関係ないことだと聞き流していた。しかしこの本を読んで、ヘアドネーションは性別・年齢に関係なく誰でもすることの出来るボランティアだということ、そして世の中には病

4

を心持ちにしている子供たちが思っている以上は大勢いることを知った。

中でも一番印象に残ったのは、小学生の男の子、仁くんのエピソードだ。まだ幼稚園の年中だった仁くんが髪のを寄付しようと思

ヨソの輪が広がっていく様子に、影響力とい
 うのは偉い人や有名人だけが持つものではな
 い。幼い子供でもふれずにやり遂げようとす
 る強い意志さえあれば、周りは理解して共感
 してくれるのだと思っただ。最初は髪を伸ばし
 て寄付するだけの簡単なホランティアだと思
 っていた。ヘアドネーションだが、髪が伸びる
 までの数年間、心折れずにやり遂げる意志の
 強さが必要で一瞬でも簡単だと思っただ。こと
 反省した。恥ずかしいことだが、嫌な思いを

してまで髪を伸ばし続ける仁くんのような覚
 悟が自分にはないからだ。
 しかし、髪を寄付することが出来ない僕に
 もできることがある。それは誰に対しても偏
 見を持たずに接することだ。ウィッグを希望
 する子供たちは髪を失ったことへの周囲の無
 理解や偏見を避けるためにウィッグを着けて
 いる。本当はウィッグなんて着けたくないか
 もしれない。子供たちが本当に望んでいるの
 は髪がなくともありのままを受け入れてくれ

る社会、偏見や差別のない社会なのだと思います。僕らは日常の中で人と違うことにとっても敏感で、普通であることを意識しすぎているように思う。自分が少しでも他人と違っている時、気づかなかつたフリして隠そうとしたり普通を装ったりする。みんな「普通の呪い」にかかっているみたいだ。

「みんなちがってみんないい」いつかCMで聞いたことのある詩のように、みんなの普通を押しつけたリせず、一人ひとりの普通を



個性として受け入れられる社会ならば、「ウィック」や病気に対する偏見だけでなく、「いじめ」もLGBTに対する差別もなくなるのではな

いかと思う。誰もが自然な姿で生きられる世界にするために僕も意識を変えるところから始めようと思う。

ジャイダックのホームパーティによると現在ウィックを待っている子どもは二百二十二名、二百二十二番目の子どもの手元に一日も早くウィックが届けられることを心から願う。